

日本二十六聖人祭

カトリック本所教会 2008年2月3日



[イタリア・チヴィタヴェッキアにある「日本 26 聖人殉教者教会」に掲げられている長谷川路可の「殉教者」の絵](#)

講演 『日本の殉教者の“初穂”』

講師 トマス・エセイサバレナ師(イエズス会)

司会者

講師のトマス・エセイサバレナ神父様をご紹介します。神父様は、イエズス会の所属です。スペイン・バスクの出身です。日本に初めて宣教をもたらしました聖フランシスコ・ザビエルの後継者で、日本におけるフランシスコ・ザビエル研究の第一人者でございます。私どもの本所教会には、1963年から45年間、ある時は麴町の四谷から、現在は練馬区石神井のロヨラ修道院から通っております。来月、3月6日には、85歳のお誕生日をお迎えになられます。5年前には、司祭叙階50周年の金祝を終えられ、叙階記念日の7月15日には、司祭生活55年を数えます。日本の教会での司祭誕生の前の段階では、エセイサバレナ神父様が、教えられた教育課程を通過しないと、神父様が生まれないという大役を長年に渡って続けられて来ました。

それでは、今日の神父様の講演「——日本の殉教者の『初穂』——」を聞くことに致しましょう。エセイサバレナ神父様、よろしくお願い致します。

講師:トマス・エセイサバレナ師

実は司会者が仰ったように、45年前からこの教会に来てはいますが、もちろん、2月5日に因んで、その直前の日曜日には殆んど来ましたが、率直に言いますが、このような講演をするのは、今日が初めてです。講演する側ではなくて、聞きに来た事も無かったです。いつも、長い期間、あの有名なチースリク神父様が講演をなさっておりました。チースリク神父様の話によれば、チースリク神父様と下山神父様は、講演の契約みたいなものを結んでいたそうです。二人とも生きている間は、毎年、チースリク神父様のお話をすることになっていました。

最初の殉教者

それで、この前、今回の、この講演を頼まれましたが、今こうして見ても、皆さん知っている顔ばかりですから、私の話を聞きたい人がまだおるのでしょうか。もう、飽きるほど聞いたのに、親切に、この話にいらっしゃってくださってありがとうございました。まず、本当のテーマに入らないうちに、ひとつ、私の心の中にあることを言っておきます。

私たちは、今日の祝日は「日本二十六聖人殉教者」と言いますが、この間、信者ではない人に、「あなたは、日本にどのくらい聖人がいると思いますか」聞いてみましたら、「26人」と答えました。しかし、列聖された殉教者は、42人です。二十六聖人が列聖されてから、100年以上の間、私たちの聖人はというと26人ということだったわけですが、20年前にドミニコ会の16人が列聖(9月26日に祝われる聖トマス西と15殉教者)されました。

そして、ちょうど二十六聖人百年祭の時、私は少し、上のいろいろな人に、このような話をして、手紙も出しましたが、答えは「慣れているから」。まあ、そうでしょうけれども、日本語では、二十六聖人というと、他にはいないと思いますが、スペイン語では、いつも冠詞を付けるのです。実は冠詞を付けると、例えば『THE』を付けると、その人たちだけで、他にはいないと思われまます。スペイン語では『LOS』。フランス語もおそらく同じでしょう。そして、そういう誤解を与えないためにと考えて、私が薦めたのは、『日本の最初の殉教者』です。最初の殉教者。これが正しいと思います。典礼暦には、実際にそのようなケースがあります。ローマには、過去に何人もの殉教者がいましたが、一番初めのローマの殉教者は、今、ちょっとその聖人の祝日の日、確か6月の終わりごろだったとしか覚えていませんが、ラテン語で言うと『ローマのプロトマルティ』です。(日本語では、『ローマの最初の殉教者たち』)

『最初の殉教者』。キリスト教の歴史の中では、聖ステファノがプロトマルティ、最初の殉教者です。もし、今後、二十六聖人の名称を変えることがあったら、少し考えてみてください。変えるのは難しいかも知れないですが、手紙を出したときにも、今さら変えるなんて、ということを言われましたが、正確には「最初の殉教者」ですからね。みんな、正しく分かってもらうためにはですね。

ついでですけれども、典礼的には、問題はありません。典礼の習慣ですが、その殉教者の国の名前を言いません。全部のカレンダーを見てください。国の名前は言いませんね。日本の殉教者とか、韓国の殉教者とか、朝鮮の殉教者とか、ベトナムの殉教者とか言わないで、どのように言っているのですか。たとえば、今日お祝いしている日本二十六聖人は、ご存じのように、全世界では2月6日に祝われます。全世界では、2月5日は昔から聖アガタの祝日ですが、日本の司教たちは、殉教した日が2月5日だったので、日本では、やはりその日を祝日として、2月6日を聖アガタの祝日とすることにしました。



日本二十六聖人殉教者のミサ
カトリック本所教会 2008. 2. 3



『日本の殉教者の“初穂”』の講演を
なさるトマス・エセイサバレナ師

西洋だと、2月6日にお祝いしますが、その名前は、「パウロ三木・エソチ」、日本語でいうと、「聖パウロ三木と同志殉教者」です。参考までに、朝鮮の殉教者は、9月20日ですが、「聖アンデレア金・エソチ」（聖アンデレア金と同志殉教者）です。「朝鮮」は付きません。ベトナムの殉教者は、11月24日、「聖アンデレア・ジュン・ラク・エソチ」（聖アンデレア・ジュン・ラク司祭と同志殉教者）、その他には、アフリカのウガンダも同様です。ご存じのように、典礼暦が新しくなったときから、義務として、全世界でお祝いする聖人は、割合に少なくなりました。その代わりに、例えば、ある修道会の聖人は、その修道会でお祝いをするとか。あるいは、その地方の人とか、その教区の人とかがありますが、ある意味で、何と言いましょうか、模範的とでも言いましょうか、昔からの殉教者や聖人は残っています。

アウグスチヌス、ヒエロニムス、フランシスクス、ドミニクスなどはもちろんですが、最近、二、三百年前からの聖人も残りました。例えば、日本の聖人は、以前は全世界ではお祝いされていませんでしたが、今は全世界すべての教会で、2月6日に、日本の殉教者のミサをたてるのです。同じように、韓国、ベトナム、アフリカ・ウガンダなど。そして、2月5日に殉教したのですが、面白いことに、昔からの「マルティオロジオ」、「殉教録」という、有名な本がありますが、聖人のリストとでも言いましょうか、どの修道院でも、昔から朗読される場所ですが、死ぬ日は、誕生日と言います。「ナタリチウム」ある意味

で、本当の「命日」ですね。命の終わりではなくて、命の始まりの日ということです。

例外として、「ヨハネ・バプチスタ」、もちろん、イエスさまとマリアさまもそうですが、あとは、「ヨハネ・バプチスタ」だけが生まれた日ですが、あとのすべての聖人は、亡くなった日、その日が分からなければ、聖人の動きに合わせてするのですが、あるいは、同じ日になったら、少し動かす場合もあります。しかし、原則として、亡くなった日。これは面白いことですが、日本の二十六聖人だけが、皆同じ日に殺されたのです。例えば、韓国の歴史を見ると、韓国・朝鮮にしても、ベトナムにしても、アフリカにしても、いろいろな時期に、例えば百年間にもわたる範囲の中で、まとめたりしているのですけれども、日本だけは、本当に同じ日に、1597年2月5日に、同じ場所で、長崎の西坂で殉教しました。これは感慨深いことです。今までは、今日の話のイントロとして、ご参考までにお話しておきました。

御昇天の聖マルチノ (聖マルチノ・デ・ラ・アセンシオン)

私たちは、いろいろな偉い人について、いろいろな立場から見ることが出来ます。偉い人というと、例えば学生にしてみれば、野球の選手とか、歴史上の有名人とか、サッカーの選手とか、あるいは、美術家ですと、有名なルネッサンスの画家とか、彫刻家とか、あるいはミケランジェロとか、いろいろな立場から見ることが出来ます。聖人の場合も同じですが、ひとつ、今日もどこかで出て来ましたが、本当に誇りを持って、私たちの聖人だと。今日は、おもに聖人のことを話します。福者のことも同じですね。今度列福される殉教者も同じです。私たちの国、私たちの教会の、本当の意味での誇りです。そして、それは、昔からです。教会の初めの頃から、いちばん尊敬されたのは殉教者でした。そして、実際に「聖人」とされたのは、殉教者だけでした。おもにローマの人たちです。そして、あまりにも有名でしたから、本当に誇りにして、その聖遺骨を持っていて、ミサは、義務として、その聖遺骨の上でたてました。ごく最近まで、どの祭壇の真ん中にも、ある聖人の、普通は殉教者のものでしたが、聖遺骨を置くことが義務とされていました。そこまで有名でした。そして、私が今日言いたいのは、いちばん初めには、誇りとしてそれを考える。尊敬する。今日のミサで、少し話しましたが、あの「勇気」、考えられないですね。このような子供がいたのです。お父さんも素晴らしい模範になりました。聖トマス小崎と聖ミカエル小崎。その勇気、それは本当に、信者ではない人は、それを見て、何のために死ぬのか分からないかも知れません。けれども、その位の決心、その位の信仰といましようかね。その位の勇気があるのは特別ですね。尊敬します。それを認めること。

ひとりずつ聖人のことを考えることは出来ますが、いちばん初めに、前にここでも、むかし話したことがあります。私には、非常に可愛がってくれた伯父がいました。伯母さんのご主人。それで、どうして可愛がってくれたのかというと、私の洗礼の代父でした。

赤ちゃんの時の代父でした。それで、度々、お小遣いをくれたことはあまり無かったかも知れませんが、どこかに行きましょう、面白いところを見せるよと連れて行ってくれたり、あるいは、昔話をしてくれたりしました。ある日のこと、その時私は、14歳ぐらいだったのでしょうか、その伯父が、「今日は、少し町から離れて、どこか面白いところへ行きましょう」と言って、そして、電車に乗って50キロぐらい行ったのでしょうか、ある田舎の町に着きました。



長崎の日本二十六聖人殉教(部分)の図(マカオ司教館・所蔵)



聖マルチノ・デ・
ラ・アセンシオン

そして、その駅で降りて、少し歩いたら、真ん前に、小さな教会があるのです。あとからそれを調べたら、14立方メートルぐらい。この聖堂よりもずっと小さいですね。まあ小聖堂ですか。そして、真ん中に、ある聖人の御像、聖人の記念品がありました。その聖人は、御昇天の聖マルチノでした。その時、伯父が説明しました。聖マルチノは、私たちと同じバスク人で、日本で殉教した人です。そして、生まれたのはこの町です。そして、町の人は、その聖人を尊敬して、今でも毎年、その日を特別な日としてお祭りをしています。

「マルティヌス・マルティリ」バスク語です。そして、そのことは忘れませんでした。そして、いつかその人のことを調べようと思っていましたが、なかなか難しかったです。あまりデータが残っていませんでしたから。そして、いちばん残っていなかったのは、面白いですよ、生まれた場所のことです。皆さんには考えられないことかも知れません。昔から、ふたつの、殆んど隣同士のような近くの村が、お互いに、この人は私の村の人だと。それで、そのことで村同士がけんかをするのです。お互いに、私たちの聖人だと取り合っているわけです。

そして、それぞれに違った名前をつけているわけです。苗字をね。私たちは修道名として「御昇天の聖マルチノ」と言っています。「マルチノ」は霊名ですが、「御昇天」は、修道者、フランシスコ会の名前ですが、苗字が、先ほど言ったように、私の町のものと、20キロぐらい離れた町で付いている名前とがあるわけです。そして、若い時に、フィリピンまで行って、頭が良かったらいいですが、神学の先生として、フィリピンで教えていたんです。その頃、少し前から、4、5年前から、イエズス会だけではなくて、フランシスコ会も日本に来るようになっていました。それで日本に来て、半年経たないうちに殉教した。神さまの御摂理です。そして、それを少し調べていったら、二十六聖人と直接に関係の無いところですが、これは、2、3日前のことですが、インターネットで分かったことがある

んです。ある古い書類の話。全部読むのは長くなってしまいますので、そこから少しだけ、面白いから読んでみましょう。

ご存じのように、1596年10月、四国の港に着いたのは、スペインのある船でしたね。サン・フェリペ号。日本の歴史にも残っている有名な船です。フィリピンからメキシコに行く途中で、船が遭難したので、浦戸港に入って、船の修理をしてもらっていました。

豊臣秀吉がそのことを知って、船の中に何を積んでいるか調べたら、たくさんの良い物、そして、ある話によると、ここから本当の迫害が始まったと。その時まで秀吉は、ご存じのように、割合に、イエズス会と他の宣教師たちと仲良くやっていたのですけれども、話によると、その船のひとは、日本人にたいへん優しい態度、大歓迎されたそうですけれども、後はだんだんと、その上の方は、そのいろいろな積み荷を見て、少し厳しくなった。その時、船員は言いました。『これはスペインの船です。スペインは、今の世界のほとんどを司る国です。フィリピンもメキシコも。そして、……』。彼らはいかに言ったかという話です。誰も証明することは出来ません。『そして、私たちのやり方として、スペインのやり方として、いちばん初めに宣教師を送るのです。宣教師が人々を信者にしてから、軍人を送るんです。』と。

それは嘘ですね。南米の歴史を見ても、宣教師が一緒か、後にいたことはあるけれども、先にいたことは無いのです。しかし、それを秀吉は、聞いたらしいです。そのときから、おもにフランシスコ会への迫害が始まったのです。そして、すぐに実行したんです。船が遭難したのは、10月でしたから、11月、12月、1月と、捕まえられてからわずかの間で殉教したわけです。

その人たちが、船に何人乗っていたかは分かりませんが、その中の7人が、大坂に行ったそうです。その7人の名前の中に、バスク人も混じっていましたが、それは、少し後で書いたものから読んでみましょうか。あまり訳が良くないかも知れませんが……。

『12月22日に、大坂に着きました。夜9時でした。非常に疲れていた。とても寒くて、服装も、靴も、履物もあまり無かったのです。着いたら、直接に、ある台所に案内された。そして、私たちのために、火を焚いた人がいました。本当にありがたいこと。寒いから。その時、ある偉い人から、(ローマ字で「kongami」と書いてありますが、その町の偉い人のこと。「kongami」。もし、私たちが「konbakusama」、多分「関白様」のことでしょう。) 私たちが関白さまとお話したければ、神父を通して話さないように、とされました。』神父は、これから捕まりますからと書いてあります。

それで、『私たちは、出来るだけ教会に行かせて下さいと願い、そして、案内されて、教会に行きました。』大坂のどこの教会かは分かりません。『私たちは、告解して、そして聖体拝領をしたいと思いました。それは、12月24日でした。』クリスマスの前日。そして、役人たちが、彼らを連れて行ったのです。その日の11時頃でした。そして、私が思いがけずそこで見つけたのが、「マルティン神父」の名です。つまり、『マルティン神父に会いました。その警備隊の人数は12人でした。』そのもとで捕まえられたのです。そして、

その晩、許しを得て、その人はマルティンと同じバスク人でしたから、マルティンと一緒に残りました。それで、『私たちは残ったから、12人のほかに8人の役人が警備として定められた』と。そこまで細かく書いてあります。『その神父は、私たちを見て、とても喜びました。しかし、泣きました。』つまり、『私たちの状態、私たちの惨めな、服装もそうですし、寒さもそうですし、足も、裸足だった』そうです。そして、真冬ですね。

もう、12月の終わり頃。『あの晩は、ずっと会話を、話をしながら過しましたが、話したり、一緒に泣いたりして、夜中になりました。』ご存じのように、ごく最近まで、クリスマスのミサは、真夜中でした。夜半のミサは。今は許されて、もっと早くやっても良いことになっていますが、『夜中にミサに与かりました。そこで告解をしました。そして、ミサの間で、聖体拝領をしました。』そこまで書いてありますね。そして、『私たちは、やはりこれからどうなるか分かりませんから、神さまと、仲良くなりたいと思って、お互いに赦し合ったのです。お互いに。神さまにも、もちろん、赦しを求めました。みんな泣きながら、お互いを赦し合いました。』そして、まだ時間がありましたから、他の話も、そして、実際に記事を、直接にはそんなに関係が無いですが、離れて、まだ手紙で、手紙を送ったのでしょう。

サン・マルティヌスと、連絡がありましたが、この記事の中心は、その手紙をバスク語で書かれていました。ですから役人には分かりませんでした。ポルトガル語やスペイン語ですと、通訳がありますが、バスク語は通訳がいなかったからね。その聖人は、バスク語で書いた手紙で返事をくれたと書いてあります。他にもありますけれども、全部を読むことは出来ません。それと、二十六聖人に直接関係がありませんが、言っておきたいのは、大坂に「御昇天の聖マルチノ」がいたという話です。まだ、その時は、30歳ぐらいでした。「マルティーノ・デ・ラ・アセンシオン」。今は「マルチノ・デ・ラ・アセンシオン」です。尊敬しましょう。

ただ、ひとつ、言いたいことですが、わたしたちが尊敬するというと、立派な人、生まれてから立派な人、では無いですね。そんな人はいません。二十六聖人も、私たちと同じような人でした。怒ったこともあれば、もちろん、病気になったこともあるし、歯が痛くなったこともありました。何年前でしたか、丁度、このマルティヌスのある手紙を読みましたが、ビックリしました。ハッキリと言います。マルチノは、フランシスコ会でしょう。イエズス会に対して酷いことをいうのです。本当に。残念ながらいま持っていません。国にいるときに見たのですね。でも、それは勘違いですね、イエズス会はフランシスコ会を赦さなかったというのは。初めの頃はイエズス会だけでしたが、フランシスコ・ザビエルの時からね。今度は、フランシスコ会、アウグスチノ会を、ドミニコ会は約50年後に日本に来ましたが、それをあまり良く思わなかったから、そのような悪口をね。それが、どこまで本当のことかは分かりませんが、確かに知っているのは、その殉教をする前に、みんな本当に仲良くしたこと。そして、死がみんなの一致になったというのが、歴史的な事実です。

殉教者の『初穂』

私のこの講演のタイトルをどうしましょうかと、今日の司会者から頼まれていましたが、「殉教者の『初穂』」と書いてくださいとお願いしました。『初穂』というと、今の人はあまり意味が分からないかも知れませんが、聖書を読んでください。何回も出てくる言葉ですね。『初穂』。旧約聖書。新約聖書よりも旧約聖書。つまり、一番初めに出来た小麦を、ぶどうも同じですが、最初のもは、これは神さまに捧げました。『初穂』。そして、その時、少し因んで、植物だけではなくて、動物もそうです。そればかりか、人間も。丁度、昨日。昨日の祝日は何だったのでしょうか。ご存じのように、『主の奉献』ですね。イエスさまは、マリアさまの最初の子供ですから、長男ですから、習慣として、神さまに捧げるために、神殿に行ったと。供え物は、それを法律的に払うことが出来ます。プレゼントとして、鳩とか山鳩とか書いてありますね。そのお金によって。しかし、『初穂』を非常に大事にしたのです。その意味で、それを考えなければなりません。



初穂 実るほど頭の下がる稲穂かな



実るぶどう 黒きまで紫深き葡萄かな

私は詳しく見ませんでしたが、ある人が、二十六聖人よりも前に殉教者がいたと言っていました。それを専門家に聞いたかったのですが、時間が無くて分かりませんでしたが、知っている限り、いちばん初めの殉教者は、この列聖された 26 人です。そして、そこから出てくる殉教者、出てくる信者は、本当に、教会の歴史には本当に珍しいことですね。いつだったか、亡くなられたチースリク神父様と話しました。「殉教者はどのくらいの人数でしょうか」、「分からない」。ただ、その時にも、今でも、「二千人については、名前、亡くなった・殺された日、場所などがハッキリと分かっています。この二千人は、明日にでも列福されて良い人たちです。もちろん、パパさまの承認があればですが……」と、言っておられました。

ご存じのように、そこから 188 人を選んだのです。今年 11 月 24 日です。長崎で列福されるのは 188 人。皆、日本人です。これまでに列福された人たちは 205 人(9 月 10 日に祝われる日本 205 福者殉教者)いますが、外国人も多いですね。今度は、日本人が、日本人を選んだのです。いろいろなデータを知っていますが、まず、この 188 人を選んだ

のです。そして、あるいは、お爺さんとか、子供とか、同じ家族とか、殉教した場所も違うのですね。『初穂』は、二十六聖人。皆さん、考えてください。初めて成ったことです。

ある人が、昔々の話ですが、4月になると、最初の日には挨拶に来ました。長い間会わなかった。若い時に先生でしたけれども。「今日は私の仕事の最初の日ですから、先生にこれを言いたかったのです。」『初穂』。やはり、何か感じるのですね。最初の。皆さん、初めてのことですよ。初めての勤めとか。結婚式も、私たちの叙階式とかね。本当の初穂。聖書に出てくるのは、その気持ちを表すための言葉として、やはり、神さまに初めから全部捧げること。良い言葉ですね。そのために選んだのです。実際にもそうですから。しかし、その意味から見ても、そのために、いちばん初めに言ったように、尊敬しましょう。

ついでに言うておきますけれども、尊敬のことですが。尊敬の結果でしょうけれども、日本はどうかわかりませんが、西洋ですと、昔から、すべての町や、村に、ときどき、山にも保護者がいるのです。保護の聖人。そればかりではなくて、職業にもいます。大工さんの保護者とか、郵便屋さんの保護者とか、全部決まっています。あります。その意味では、私たちの、おもにこの教会は、初めからその保護者として、二十六聖人をいただいています。この二十六聖人が列福されたのは、1622年でしたね。つまり、列福 去れたのは迫害の中でしたね。それで、列聖されたのは、1862年。その時は、もう明治時代に近づいていて、少しずつ、だんだんと日本も、門を開いて、宣教師が、主に、フランス人のパリミッションがだんだんと入ってきた時ですね、列聖されたのは。それから105年経った、今から20年前にドミニコ会の16人が列聖されました。その時に、初めて二人、女性が聖人になりました。ドミニコ会の関係の女性が二人、二十六聖人の中には女性はひとりもいませんけれどもね。女性と子供もみんなそうです。言いたいのは、やはりお母さんから教育が、信仰に基づいた生活の良い心がけがあった。と覚えておいたほうが良いです。

ひとつ、尊敬。ひとつ、イミテーション、それに倣うこと。素晴らしいですね。私たちの国にも聖人がいますね。列聖・列福された人がいますね。誇りにするのは良いことですけれども、ひとつの目的は、列聖されるのは、もちろん、その人を認めるため、全世界の人がその人の功績などを認めるためですが、もうひとつは、その人に倣うためです。私も何回も話したことでしょう。二十六聖人のうちの、トマス小崎のような若い人、子供のような人もいます、親子もいます、いろいろな点で私たちの模範になることです。

よく、信者として、私たちは昔から言われていたことです。それに倣ってください、と。それに倣う、ということ。イミテーション。要注意なことは、私は先ほど言ったように、もう若くはないですから、日本にも、もう61年おりましたから、経験がありますけれども、良い心を持って、日本人の話ですよ、西洋人も同じですけれども、信者になって、私は明日からテレジアのような人になります、とか、第二のフランシスコ・ザビエルのようになりますとかいうのは違うということ。そういうことは、失敗することが初めから決まっています。誰もなれませんね。他の人、みんな幸いにして、違うのです。顔も違うでしょう。それと同じように、神さまの恵みも、神さまの目的も、神さまの超自然的恵みも違う

のですから。それでは、どの意味で聖人に倣うのかというと、やはり、いろいろな、おもに先ほどのミサの説教で話しましたが、「勇気」です。その「力」を見て、私にも、自分の「私」ですよ、自分の性格、自然的な、あるいは超自然的な恵みをもって、歩んでいる私はどのようにして、キリストに従うか、よい参考になります。同じような人になりませんが、参考になります。

これも、だいぶ前の話です。ちょうど60年前の話です。ちょうど日本に来る、終戦後のことですが、日本に来る方法はあまり無くて、だいぶ待たされたんです。船もなければ飛行機もなかった。そして、やっとスペインからフィリピンまで、クリスマスのために飛行機が飛ぶと。特別な飛行機が。そして、4人でしたが、4人乗る席がありますから、乗って下さいと。ただ、その当時の飛行機ですよ。大きなものと思ったのですが、30人から40人乗りのものでした。そして、普通は、夜はあまり飛ばないですね。幸いにして？最初の夜は、ローマでした。そこでローマ見物を。生まれて初めてでした。その夜、ローマを見てから、次の日。また飛行機に乗って出発する前に、ひとりの女性が、フィリピン人でした、真ん中に立って、すごい説教をしたのですよ。その人は、ローマの殉教者、コロセウムですか、殉教者の場所を見て、そして説明をして、そして、説教は何ですか。「皆さん！あの人こそ本当の信者でしたね！ 私たちは生ぬるい信者です！」私たちはローマンカラーを隠すぐらいの気持ちで、聞いていましたが、今でも覚えています。1947年12月20日でした。朝。その人の名前も知りませんけれども。

つまり、言いたいのは、あれを見て、ひとつの模範になりました。私たちはいかがでしょう。いくらでもケースはあります。今でも、生きている人を見てもね。よく、フランシスコ・サレジオの話がありますが、人はサレジオを見て、「ああ、私たちもこのような人になりたい」と、よく言われたそうです。同じような人にはなれませんが、やはり、自分なりの、本当の信者になります。その意味での「イミテーション」ですね。単なる、誇りにする、良いこと。しかし、それだけではなくて。そして、二十六聖人は、26人いますから、あの人についてはあまり知られていないけれども、この人については細かく分かるのですから、どの点で優れているのかが分かります。例えば、子供たちのあの勇気。とても考えられないこと、ひとつの模範になります。まだありますけれども、時間もあまりありませんから次に行きましょう。

そして、最後の話は、取り次ぎ。よく教会の言葉として、用語として、「取り次ぎ」があります。このことに反発を感じる人も多いです。ハッキリ言うと。おもにプロテスタントのほうからになりますが。取り次ぎ者はキリストだけです、ということですね。なぜ私がこの聖人に祈るのですか。どうしてマリアさまに祈るのですか。直接に、キリストに祈るのですか。皆さん、このことを考えたことがありますか。しかし、教会の初めからですよ、人を、生きている人でも、聖書にも出てきますね、「お願いします。キリストにこのことを伝えてください」とかがありますが、死んだ人、つまり、来世に行った人を取り次ぎ者として、祈るといのはね。

カタコンブを見た時に、先ほど話したローマに行った時ですが、その中に落書きのようでしたが、伝説によると、バチカンに運ばれる前に、そこにペトロの遺骨があったようですが、『ペトロ、私のために祈って下さい』（ペトロ オラプロメ）と書いてありました。ペトロは、亡くなっていますね。それもだいぶ前に。つまり、初めから、その意味があります。マリアさまの、知られている、一番古い祈りは何ですか。マリアさまの祈りに対する訳はいろいろとありますが、『神のみ母よ、私たちは御保護を仰ぎます。いつ、どこでも、私たちの祈りを聞き入れ、御助けをもって、すべての危険から護ってください。』これが知られている、いちばん古い、マリアさまにたいする祈りだそうです。

あるいは、今でも、いつも「アベ・マリア」を唱えるときは、「死を迎えるときも祈ってください」、つまり助けてくださいという、私の取り次ぎ者としてのことです。その意味での取り次ぎも大事ですよ。この話をしたのは、ときどき聞えることですが、「聖人には意味が無い」。もっと酷いことがあります。ここに御像があります。あるいは御絵があります。プロテスタントのほうから、カトリック信者は、その御像を礼拝していると。御像に祈っていると。そんなことはありません。その御像は、木やコンクリートや石から出来たものですが、その人のことを表わす物ですね。私たちには、それは当たり前のことです。そう言っている人も、結構いますね。言っている人だけではなく、そう書いている人もいます。よく覚えておいてください。

そして、私たちは、聖人に、具体的に、二十六聖人に祈る時は、本当に深い意味があります。伝統的に、教会の初めから今まで、いつも人を通して祈るのは、教会の、とても大事な習慣です。そして、遠慮なく、私たちのために、私のために。私たちの保護の聖人ですから。保護の聖人と言いましたけれども、日本の中で、どの位、日本二十六聖人に捧げられた教会があるのでしょうか。ほとんどの教区に、例外はありますけれども、少なくともひとつはあります。東京には、ここだけだと思います。知っている限り。この前、青梅教会に行ったら、驚きました。聖トマス小崎に捧げられた教会でした。九州に行くと、長崎、鹿児島にあります。聖ルドビコ茨木などの個人に捧げられた教会があります。

保護の聖人は、二つのことを表わすことがあります。ひとつ。誰が、どの宣教師が初めてその教会に行ったかですね。例えば、ドイツから来た神父様ですとドイツ人の聖人になったり、あるいはスペインの宣教師だったら、スペインの聖人になったりすることはあることです。そして、もうひとつ。人の信心ですね。もし、この教区に、ひとつも二十六聖人の教会が無いと言ったら、ちょっと、おかしいですね。やはり、自然的に、そのような信心があれば、新しい、小さい教会だから、二十六聖人に捧げましようとか。幸いにして、日本には多くありますね。ついでですが、フランシスコ・ザビエルの名をつけた教会は、日本では35ぐらいあります。学校などは別の話です。教会、パロキユア、小教区で、ですね。

尊敬、倣う、赦す、そのために祈る

そして、これを忘れないで下さい。今日は、三つの事を話したかったのですが、ひとつは、尊敬すること。よく私たちは町に行って、その町の偉い人の像とか記念碑とかを見ることがありますが、当たり前ですね。恩人とか、あるいは有名な政治家とか、たまに模範的な人ではない人だったりすることも実際にありますが、町の誇り、学校の誇り。私たちの誇りは、この二十六聖人です。

ご存じのように、その中の20人は、日本人でした。あとは外国人。イエズス会は3人で、3人とも日本人。でも3人と言いましたが、本当はひとりですね。「聖パウロ・三木」。他の人は若い人で、そのイエズス会の方に勤めていたと思いますが、そのために、殉教者の中に入ったのです。本当の意味で殉教者ですね。フランシスコ会は6人。その中でもスペイン人が多いですけども、メキシコ人もいます。またインドの人もいました。あとは日本人。それが、ひとつ。尊敬、誇りにすること。

もうひとつ。それに倣うこと。私たちの経験ですけども、どうしてこの子供は、そのようなことをするのでしょうか。家でお父さんのことを見たからです。良いことも、悪いことも、お父さんそっくり。顔だけではなくて、そのやり方も。真似をするんです。良い意味での。それに倣うこと。一般的に聖人の、つまり、信仰をそのまま生きる人ですね、信仰、愛、そしてひとつだけ強調したいところがあります。

最後です。何か月か前に、スペインの内乱の時に殺された、おもに司祭・シスター・神学生、普通の信者も少しいましたが、列福式がありました。ローマで。499人が列福されました。反発もありました。いろいろなところから。内乱の時ですから、いかにしてこの人たちが列福されるのか。殺されたのは、あるいは政治的な理由によることもあるでしょう。他にもたくさんあって、7千人ぐらいいますけれども、面白いことに、ひとつの基準があって、それが分かれば、列福されても良いことになっていました。その基準は何だと思えますか。「敵を赦すこと」。死ぬ前に、態度、あるいは言葉でも赦してあげた人は、本当の殉教者ですと。キリストもそうでした。最初の殉教者、聖ステファノもそうでした。そして日本二十六聖人は、言うまでもなく、そうです。その点では、本当に、心から人を赦すこと、このポイントが非常に大切なところです。私たち信者としての。そして、ヨハネ・パウロ二世と、今のパパさまが、「そのポイントだけ確かですか、証明がありますか、それなら結構です。列福しましょう」。そうしないと、いろいろと複雑なこともありますから、どこまでが信仰のため、どこまでが政治的な意味で殺されたのか、この場合は、そういう基準ではないですけども。

「赦す」私たちの生活には、よく愛とか信仰とかいいます。本当にそうですが、具体的に赦す気持ち。これを強調するのはね、私の経験です。話してもいいでしょう。日本人には難しいところ。ハッキリ言ってしまってもすみません。「赦すこと」というそのような伝統が、無いというと厳しいですけどもね。ちょっと、薄いのです。私が若い人の指導者

だった頃、そのことをよく話しました。反省させられました。もしかしたら、具体的な人として、友だちあるいは同じ学校の中で、憎しみとか感じることもある、それはある面では仕方が無いことだと思います。しかし、それを乗り越えて、私は赦します。例えば、その人のために祈ります。それこそ、殉教者。すべての聖人はそうですよ。殉教者の、ハッキリした教えです。

キリストは十字架の上から赦しました。最初の殉教者ステファノは、ハッキリと、聖書に書いてあります。赦しました。他の殉教者は、そうです。その意味での、ひとつの大事な真似ですね。「……に、倣うこと」。これが二番目のポイントです。三番目のポイントは、その取り次ぎのこと。おもにここにいるのは本所教会の信者の方が多いと思いますけれども、やはり、私たちの教会の保護者です。やはり、そのセンスがありました。残念ながら、私たちにはあまり無いですね。少し古い本を読むと、例えば、ザビエルの手紙を読んでも、日本に来る前、「今日、祈っていました」と、ある手紙に書いてありました。聖ミカエルに祈っていました。大天使ミカエルです。いかにして？ その天使に、日本が任されているから。ただ、ザビエルがどこでそのことを知ったのか、分かりませんが、そう書いています。つまり、その人だけではなくて、国も捧げられます。

いま思い出したのは、私たちの、イエズス会の最初のひとり、福者ですけれども、ザビエルと同じ歳で、勉強も一緒、一緒にイエズス会を建てた「パブ」。福者です。神父になったんです。割合に早く亡くなりましたけれども。彼は、説教とか、黙想指導とか、授業とかが有名でしたが、主に、1対1の対話のことです。いつも、対話する前に、その人の保護の聖人にお祈りをしたのです。無邪気なことかも知れませんが、しかし、センスがありますね。どの人にも保護の聖人がいます。私の保護の聖人は、主に、霊名ですか、洗礼を受けたときの聖人です。段階として、この教会も、日本国も同じですが、その、「インテレシオ」そして祈り。今日も初めから。

一番大事なものは、もちろん、キリストであること。それは、祈りの終わりに、「キリストによって」と言って終わりますね。「キリストによって」どの教会の祈りにも。キリストが最高の取り次ぎ者であることは、もちろん、認めています。それは言うまでも無い事です。しかし、他にもいろいろな聖人がいます。

今日の、私の話はこれで終わらせていただきますけれども、役に立ったかどうか分かりませんが、私が考えたことを、そのまま、簡単にお話しました。ご覧のように、私は専門家ではないです。そのような専門家ですとね、簡単に殉教者がどこから来てどこに行ったか、どこでぶつかったか、どこに問題があったか、誰が誰の子供でしたか、そういうことは、全部専門家に任せましょう。そして、専門家のいいところは、普通は、それを書くんです。記事とか。幸いに多いですね、皆さん、切支丹時代の本とか、専門家が多いです。ときどき、信徒じゃない人もいます。ただ、要注意。少なくなってきました。私が日本に来た時、60年前ですけれどもね、今よりも多かったです。それは、どこに問題があるのですか。人が少ないからだけですか。そんなに興味が無いからですか。そして、不思議なことに日本

人もそうですけれども、外国人が多いですね。切支丹時代について研究した人、考えた人たちは。シュッテ神父ですか、チースリク神父ですか、パチェゴ(結城了悟)神父ですか——

私は神学生に何回もその話をしました。何か、興味が湧くようにね。皆さんも、子どもか孫かはわかりませんが、よく話してください。そして、一般的に、最近では、歴史に対する、偏見みたいなものがありますから、若い人は、歴史よりも他のことを勉強したいからかも知れませんが、日本の切支丹時代の、素晴らしい時代の研究をすとかね。お願いします。

以前、昔々の話ですが、私はある時期、神学生の係でしたが、毎月、司教さまから頼まれて、お小遣いを渡していたのですね。神学生に。そして、大阪教区の神学生が来て、「今月のお小遣いをお願いします。」その時に、どの位の金額を渡したのか思い出せません。だいたい前の話ですから。ちょうどその時は、二十六聖人の列聖 100 年祭でした。「二十六聖人の名前を知っていますか。」「ひとりかふたりなら……」、「小遣い無し。覚えたらお小遣いを渡しましょう。」こんなやり取りもありましたが、これはひとつの冗談に過ぎないけれども、そのような、何かあったら良いかも知れませんか。皆さんに教えてください。普段からの話にも出るように。出なければ、子どもたちは、その話よりもゲームのほうが面白いでしょうから。最後に、私の話はあまり役に立たないかも知れませんが、お祈りをもって、補いたいと思います。

父と子と聖霊のみ名によって、アーメン。

主よ、あなたは、この二千年間のあいだ、実際にあなたの教えを、教えに従った人、その教えに従って生活した人、たくさん作ってくださいました。ありがとうございました。私たちは、今日、おもに 16 世紀の終わりに、16 世紀の終わりからです、いろいろな聖人、あるいは、列聖されなかった立派な人の模範を見せてくださいました。それも感謝しますが、お願いがあります。私も、他の人に、周りの人に対して、そのような人になるようにと。少しでも、尊敬されなくても結構です、しかし、少しでもよい道を、自分の態度、やり方、望みをもって、見せること、教えることが出来るように。二十六聖人を通して、私たちに、私にこの恵みを与えてください。

父と子と聖霊のみ名によって、アーメン。

どうも、ありがとうございました。

司会者

ありがとうございました。第二部の講演、「——日本の殉教者の『初穂』——」トマス・エセイサバレナ神父様でした。もう一度、大きな拍手でお送りしたいと思います。ありがとうございました。